

果樹の生育概況

令和7年6月16日現在
福島県農業総合センター果樹研究所

1 気象概況

6月1～3半旬の平均気温は20.4℃で、平年より1.1℃高かった。また、この期間の降水量は54.0mmで平年比140%、日照時間は113hrで平年比110%であった（表1）。

表1 半旬別気象表（果樹研究所）

月	半旬	平均気温(℃)			最高気温(℃)			最低気温(℃)			降水量(mm)			日照時間(hr)		
		本年	平年	平年差	本年	平年	平年差	本年	平年	平年差	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
6	1	18.3	18.9	-0.6	24.2	25.0	-0.8	12.6	13.3	-0.7	17.5	12.5	140.0	40.1	38.1	105.2
	2	21.9	19.3	+2.6	29.4	24.8	+4.6	15.4	14.6	+0.8	2.5	10.7	23.4	36.0	33.0	109.1
	3	21.0	19.7	+1.3	26.3	25.2	+1.1	16.1	15.2	+0.9	34.0	15.4	220.8	37.0	32.1	115.3
平均・合計		20.4	19.3	+1.1	26.6	25.0	+1.6	14.7	14.3	+0.4	54.0	38.6	139.9	113.1	103.2	109.6

2 土壌の水分状況

6月15日時点の土壌水分（pF値：果樹研究所ナシほ場：草生・無かん水）は、深さ20cmで2.6、深さ40cmで1.9、深さ60cmで2.2となっており、概ね適湿状態である（図1）。

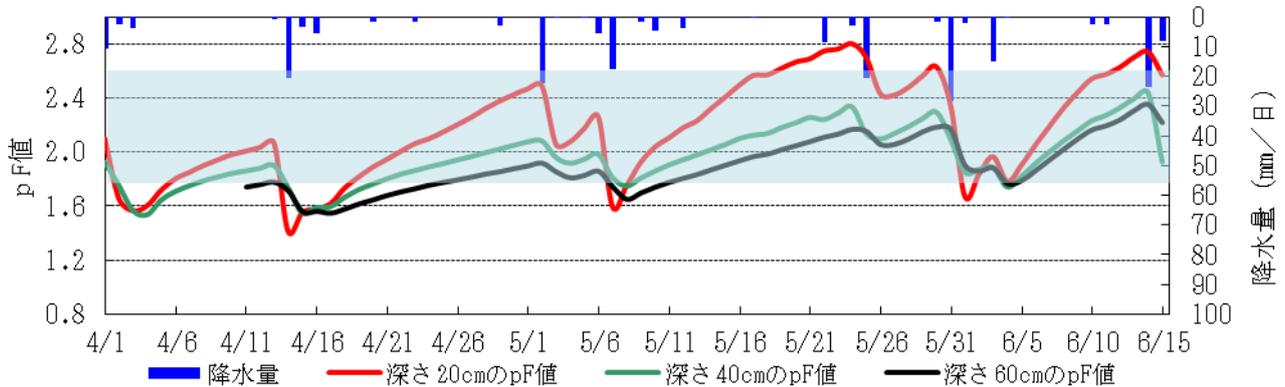


図1 土壌 pF 値の推移（果樹研究所ナシほ場：草生・無かん水）
図中の網掛け部は、適湿の範囲（pF1.8-2.6）を示す

3 生育状況

(1) モモ

ア 果実肥大

果実肥大を暦日で比較すると、「あかつき」は縦径が46.3mmで平年比107%、側径が45.1mmで平年比116%と平年より大きい。「ゆうぞら」は縦径が47.9mmで平年比110%、側径が41.2mmで平年比112%と平年より大きい。満開後日数で比較すると、両品種ともに平年よりやや大きい（図2）。

イ 新梢生長

満開後60日における「あかつき」の新梢長は12.8cm（平年比108%）で平年よりやや長く、展葉数は14.8枚（平年比101%）で平年並、葉色は41.2（平年比97%）で平年並であった。「ゆうぞら」は、新梢長が17.1cm（平年比131%）でかなり長く、展葉数は16.3枚（平年比115%）で多く、葉色は42.3（平年比100%）で平年並であった。新梢停止率は「あかつき」が37.5%（平年比67%）で平年よりかなり低く、

「ゆうぞら」が 30.0%（平年比 50%）で平年よりかなり低い（表 2）。

ウ 核障害の発生

満開後 60 日における「あかつき」の核障害発生率は、核頂部亀裂が 25.0%で平年よりかなり少なく、縫合面の割裂が 15%と平年よりかなり多い傾向にある（表 3）。

エ 硬核期

本年のモモ「あかつき」の硬核期開始は 6 月 5 日（満開後 51 日）で平年より 4 日早かった（表 4）。

オ 発育予測

DVRモデルによる「あかつき」の発育予測について、気象庁の気象予報を用いた場合は、本年の収穫開始日は 7 月 27 日で平年より 4 日早く、収穫盛期日は 7 月 31 日で平年より 4 日早いと予測される（表 5）。

なお、この時期の生育は直前の気温に左右され、今後の気温の推移により、大きく変動する場合がありますので注意する。

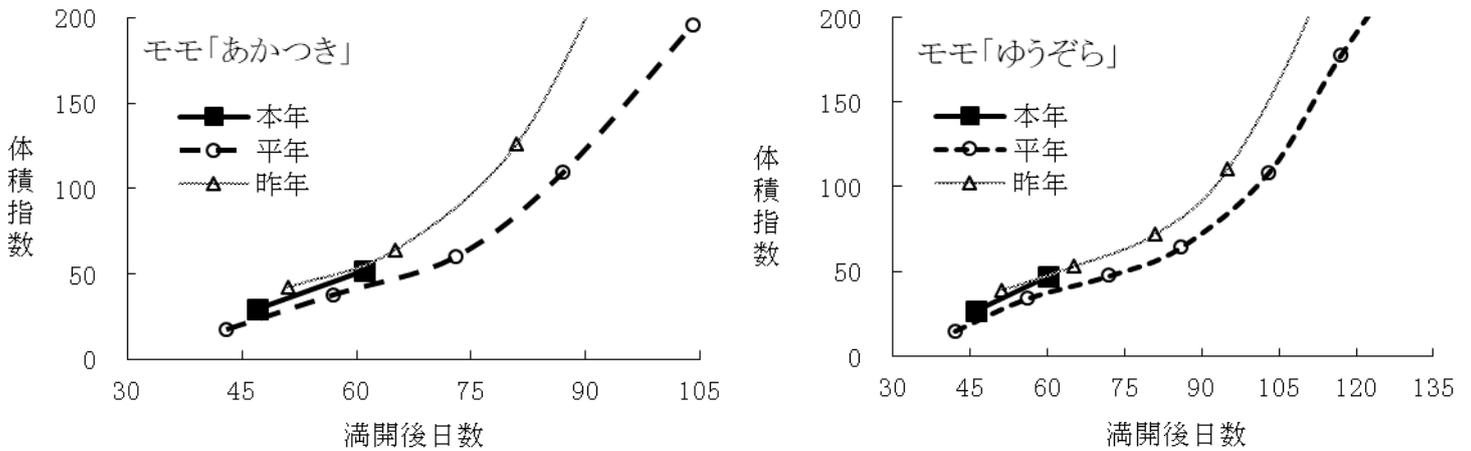


図 2 モモの果実肥大

表 2 モモの新梢伸長（満開後 60 日調査）

品種	新梢長 (cm)			展葉数			葉色 (SPAD)			新梢停止率 (%)		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
あかつき	12.8	11.9	108	14.8	14.6	101	41.2	42.3	97	37.5	55.6	67
ゆうぞら	17.1	13.1	131	16.3	14.2	115	42.3	42.4	100	30.0	59.9	50

注) 平年値は 1996～2020 年までの平均値。

表 3 モモの核障害発生状況（品種：あかつき）

年	満開後日数	30日	45日	50日	55日	60日	65日	70日	75日	85日	95日	収穫果
2025	核頂部亀裂	30.0	40.0	30.0	20.0	25.0	—	—	—	—	—	—
	縫合面割裂	0.0	0.0	0.0	0.0	15.0	—	—	—	—	—	—
2000 ～2020	核頂部亀裂	35.1	37.1	45.5	51.9	53.3	50.7	49.1	42.9	48.1	49.3	48.8
	縫合面割裂	0.0	0.0	1.7	2.4	11.4	22.1	23.0	21.9	32.6	36.8	24.6

注) 平年値は 2001～2020 年までの平均値。

表4 モモ「あかつき」の硬核期

品種	硬核期開始日			
	本年	昨年	平年	平年差
あかつき	6月5日	5月28日	6月9日	4日早い

表5 モモ「あかつき」の発育予測

[発育速度 (DVR) モデルによる発育予測 : 6月16日現在]

	観測日		今後の気温経過			
	昨年	平年	気象予報	平年並	2℃高い	2℃低い
収穫開始日	7月19日	7月31日	7月27日	7月28日	7月27日	7月28日
収穫盛期日	7月22日	8月4日	7月31日	7月31日	7月31日	7月31日

注1) 平年は1991～2020年の平均値。

注2) 今後の気温経過の気象予報とは、気象庁が発表している週間予報、2週間気温予報及び1ヶ月予報気温(3～4週目の平均気温)を反映し、以降の気温は平年並に経過した場合の予測値。

注3) モモ「あかつき」の発育予測は1～2日の誤差があることに留意する。

(2) ナシ

ア 果実肥大

果実肥大を暦日で比較すると、「幸水」は縦径が27.3mmで平年比98%、横径が33.4mmで平年比104%とほぼ平年並である。「豊水」は縦径が32.4mmで平年比110%、横径が35.4mmで平年比113%と平年より大きい。満開後日数で比較すると、両品種ともに平年並である(図3)。

イ 新梢生長

満開後50日における「幸水」の予備枝新梢長は76.7cm(平年比96%)、不定芽新梢長は71.8cm(平年比99%)で平年並である。予備枝新梢の葉枚数は21.6枚(平年比96%)で平年並である(表6)。

満開後50日における「豊水」の予備枝新梢長は71.3cm(平年比85%)で平年より短く、不定芽新梢長は64.8cm(平年比91%)で平年よりやや短い。予備枝新梢の葉枚数は21.5枚(平年比95%)で平年よりやや少ない(表6)。

ウ 生育予測

6月16日現在のDVRモデルによる「幸水」の裂果期予測は、7月8日頃で平年より6日早い見込みである。

また、DVRモデルによる収穫盛期の予測は、8月25日頃で平年より4日早い見込みである。

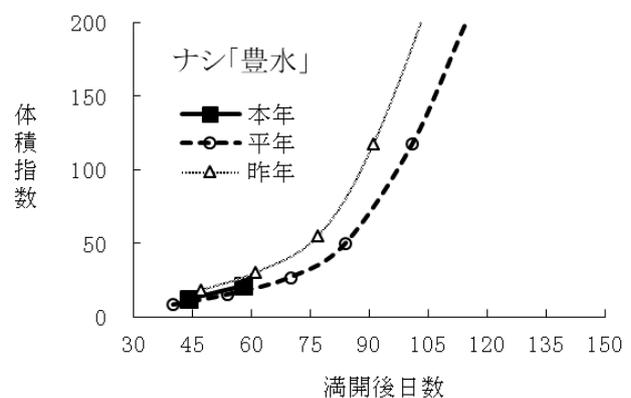
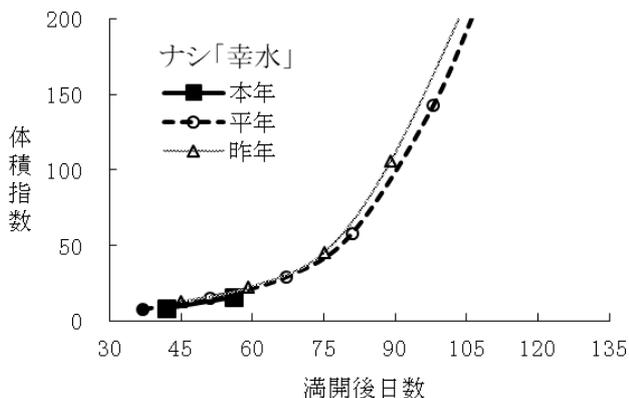


図3 ナシの果実肥大

表6 ナシの新梢生長（満開後50日）

品種	予備枝新梢長 (cm)			不定芽新梢長 (cm)			予備枝葉数 (枚)		
	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比	本年	平年	平年比
幸水	76.7	80.1	96	71.8	72.9	99	21.6	22.5	96
豊水	71.3	84.3	85	64.8	71.3	91	21.5	22.5	95

注) 平年値：「幸水」の新梢長は1990～2020年、葉枚数は1998～2020年、「豊水」の新梢長は1991～2020年、葉枚数は1998～2020年の平均

(3) リンゴ

ア 果実肥大

果実肥大を暦日で比較すると、「つがる」は縦径が41.5mmで平年比103%、横径が45.0mmで平年比104%と平年並である。「ふじ」は縦径が39.2mmで平年比106%、横径が38.6mmで平年比104%と平年並である。満開後日数で比較すると、両品種ともに平年よりやや小さい(図4)。

イ 新梢生長

満開後50日における新梢長は、「つがる」が20.4cm(平年比96%)、「ふじ」が19.8cm(平年比101%)と平年並であった。新梢停止率は、「つがる」が93.3%、「ふじ」が100.0%であった(表7)。

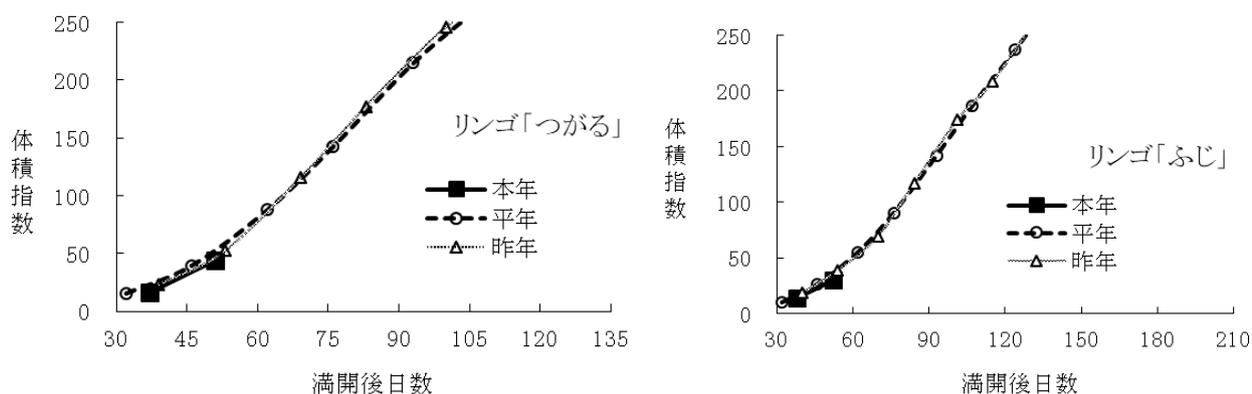


図4 リンゴの果実肥大

表7 リンゴの新梢長及び新梢停止率（満開後50日）

品種	満開後日数	新梢長 (cm)				新梢停止率 (%)	
		本年	昨年	平年	平年比 (%)	本年	昨年
つがる	20	11.3	14.7	13.1	86	6.7	25.0
	30	17.2	18.1	18.0	96	70.0	66.7
	40	19.7	19.0	20.4	97	86.7	91.7
	50	20.4	19.0	21.3	96	93.3	100.0
ふじ	20	13.7	17.6	15.6	88	13.3	38.9
	30	18.0	19.6	18.9	95	51.7	80.6
	40	19.8	19.6	19.5	102	96.7	100.0
	50	19.8	19.8	19.7	101	100.0	100.0

注) 新梢長平年値は、1996～2020年の平均
 供試樹：「つがる」/M.26/マルバカイトウ19年生
 「ふじ」/マルバカイトウ22年

(4) ブドウ

ア 新梢生長

発芽後 50 日における「巨峰」の新梢長は 87.4 cm（平年比 102%）、展葉数は 12.1 枚（平年比 99%）と平年並である（表 8）。

イ 開花状況

開花始めについて、「巨峰」及び「あづましずく」は 6 月 4 日で平年並、「シャインマスカット」は 6 月 7 日で平年並であった（表 9）。

満開について、「巨峰」は 6 月 8 日で平年並、「あづましずく」は 6 月 8 日で平年より 1 日早く、「シャインマスカット」は 6 月 11 日で平年並であった（表 9）。

表 8 「巨峰」の新梢生長（発芽後 50 日）

発芽後 日数	新梢長 (cm)			展葉数 (枚)		
	本年	平年	平年比 (%)	本年	平年	平年比 (%)
50	87.4	85.4	102	12.1	12.2	99

注) 平年値は 2006～2024 年の平均

表 9 ブドウの開花日

品 種	開花始め			満開		
	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年
巨峰	6 月 4 日	6 月 4 日	5 月 27 日	6 月 8 日	6 月 8 日	6 月 1 日
あづましずく	6 月 4 日	6 月 4 日	5 月 24 日	6 月 8 日	6 月 9 日	6 月 1 日
シャインマスカット	6 月 7 日	6 月 7 日	5 月 29 日	6 月 11 日	6 月 11 日	6 月 5 日

4 栽培上の留意点

(1) 共通

ア かん水

5 月から夏期にかけて果樹園からの 1 日当たりの蒸発散量は、晴天日で 6～7 mm、曇天日で 2～3 mm、平均で 4 mm 程度であるので、1 回のかん水は 25～30mm 程度 (10 a 当たり 25～30 t) を目安とし、5～7 日間隔で実施する。保水性が劣る砂質土壌などでは、1 回のかん水量は少なくして、かん水間隔を短くする。

イ 草刈り

樹と草との水分競合を防ぐため、草生園では草刈りを行う（地表面からの蒸発散量は、草生園において刈り草をマルチした場合、草刈りしない場合の約半分とされる）。

ウ マルチ

刈り草や稲わらのマルチを行い、土壌水分の保持に努める。

(2) モモ

ア 修正摘果

硬核期が終了し、果実に肥大差が見られるようになったら修正摘果を実施する。

修正摘果は、果実肥大や果形に注意して実施する。特に、果頂部が変形している果実や縫合線が深い果実、果面からヤニが噴出している果実、果皮が変色している果実、果頂部の着色が早い果実などは、核や胚に障害があることが多いので、これらの果実に注意して摘果を実施する。また、園地ごとに核障害の発生状況を確認し、核障害の発生が多い場合は修正摘果を 2～3 回に分けて実施し商品果率の向上に努める。

樹勢低下が見られる場合には、新梢生長と果実肥大が確保されるよう葉枚数に応じた着果量にするなど、適正な着果管理に留意する。

イ 着色管理と極早生品種の収穫

「あかつき」の収穫期は平年よりやや早まる予測であるが、今後の気象によって変

動するため、各園地及び品種ごとの果実の成熟状況に注意し、枝吊りや支柱の設置、夏季せん定及び反射シート設置等の収穫直前の管理作業は、時期が遅れないよう計画的に実施する。

ウ 核障害多発時の注意事項

核障害のある果実は胚に障害が見られることが多い。硬核期以降に胚が障害を受けた場合、多雨条件下では生理落果が発生しやすくなり、また、胚に障害を持つ果実は早熟することが多いので、収穫が遅れないように注意する。

(3) ナシ

ア 着果管理

仕上げ摘果は、予備摘果終了後速やかに実施する。この際、樹勢の低下や果実肥大の鈍化が観察される場合は新梢停止期前（満開後60～70日）に着果数の10～15%程度を目安に摘果し、着果数を調整する。なるべく果形、肥大の良い果実を残し適正着果量に調整する。

イ 新梢管理

「幸水」で副芽枝（果そう葉）新梢の飛びだしが多い場合はこれを摘心する。副芽枝を摘心する場合は側枝基部20～40cm程度を目安とし、ロゼット状の基部葉とその上位2～3節を残して摘心を行うと果実肥大と花芽形成に効果が期待できる。

「豊水」では、満開後60日頃に新梢伸長が緩慢となる予備枝は、翌年の果実肥大と果形がよいので、直ちに誘引を開始する。

また、下垂したり枝越しとなった新梢は方向を修正するとともに、側枝先端部の新梢が倒れた場合には立てるように誘引し、受光態勢や薬剤の通りを良好にする。

ウ 予備枝管理

「幸水」の予備枝誘引適期は、新梢停止期の約10日前の満開後65日頃である（新梢の生育状況は新梢長が90～100cm、展葉節数が23～26節）。

DVR予測による本年の裂果期予測（新梢停止期）は7月8日頃であるため、6月下旬頃が作業のピークとなるように誘引を始める。

(4) リンゴ

ア 着果管理

仕上げ摘果は満開後60日までに実施する。仕上げ摘果の遅れは花芽分化率低下の原因となる。結実の少ない園地は着果数の確保を優先し、著しい不良果そうを対象に最小限度の摘果を行う。

仕上げ摘果終了後は、随時修正摘果を実施し、小玉果や変形果、病虫害の被害果、傷果、サビ果等を摘果する。

イ 枝吊り・支柱立て

果実の肥大にともない枝が下垂するので、樹冠内部の受光条件の改善、枝折れ防止及び防除効果の向上のため支柱立て及び枝吊りを実施する。なお、高温条件下では、果実に直射日光が当たると日焼け果が発生しやすくなるため、果実が果そう葉で隠れるようにするなど着果位置に留意する。

(5) ブドウ

ア 摘粒

1回目のジベレリン処理後、実止まりが確認されしだい、穂軸長の調整と予備摘粒を実施する。「巨峰」の穂軸長は7cm程度を目安に上部の支梗を切り下げる。

予備摘粒は2回目のジベレリン処理までに内向き果、小果、傷果等を取り除く。

2回目のジベレリン処理が終了しだい、仕上げ摘粒を開始する。果房の内部に入り込みそうな果粒や突出した果粒、密着しすぎている箇所を整理する。さらに、最上段の支梗には上向きの果粒を残し、穂軸を囲むように配置すると果房の仕上がりがよい。仕上げ摘粒は、時期が遅れると果粒同士が密着し、作業性が低下するとともにハサミによる傷果の発生も多くなるため、果粒肥大の早い品種から計画的に作業を進めるよ

うにする。また、摘粒の際は、果房には触れず穂軸を持って作業し、果梗は基部から切り落とすよう心がける。

イ 摘房

着果過多は着色不良を招くため摘房を実施する。早めの摘房は養分の浪費を防ぎ、果実品質向上の効果がある。果粒肥大の揃いが悪い果房等を中心に摘房を実施する。収量を確保するため果房数を多く残しがちであるが、品質のよい果実を生産するため、適正な着房数管理に心がける。

ウ 新梢管理

実止まりが確認されしだい、特に強勢な新梢や混み合っている部分の新梢を整理し、棚面の明るさを確保する。また、伸び続けている副梢は2～3葉残して摘心する。

5 病虫害防除上の留意点

(1) 病害

ア リンゴ褐斑病・輪紋病

果樹研究所における褐斑病の果そう葉及び新梢葉での発病は既に確認されており、県内各地でも発病が確認されている。梅雨期に入ると二次感染を繰り返すおそれがあるため、10日間隔で本病防除剤を使用し、防除を徹底する。また、輪紋病は果実、枝梢部ともに感受性が高い時期となるため、6月中旬頃にいずれの病害にも効果がある薬剤を十分量散布する。

イ モモせん孔細菌病

梅雨期は発病が急増するおそれがあるため、引き続き注意が必要である。薬剤防除に当たっては、10日間隔でせん孔細菌病防除剤を使用する。その際、早生種は収穫前日数に十分注意する。また、罹病部位は見つけしだい取り除き、発生拡大が懸念される場合は速やかに袋かけを行う。

ウ モモホモプシス腐敗病、灰星病

早生種では灰星病の重要防除時期に当たるので、6月中下旬及び7月上旬頃に灰星病防除剤を散布する。中～晩生種では灰星病とホモプシス腐敗病を同時防除するために、7月上旬頃にダコレート水和剤 1,000倍を使用する。薬剤防除は、収穫前日数(3日前)に十分注意して実施する。

エ ナシ黒星病、輪紋病

梅雨期は二次感染により黒星病の発病が急増するおそれがあるため、罹病部位は見つけしだい取り除くなど、耕種的防除を徹底する。特に、「幸水」では本病に対する果実の感受性が高い時期であるため、注意が必要である。罹病部位は見つけしだい除去して適切に処分するとともに、輪紋病も重点防除時期になるため、6月中下旬及び7月上旬頃に両病害に効果がある薬剤を十分量散布する。

オ ブドウ晩腐病

6月中～下旬頃の幼果期にミギワ 20フロアブル 2,000倍を散布し、散布後速やかにカサ掛けを行う。カサは雨もりを防ぐように丁寧に行う。

(2) 虫害

ア モモハモグリガ

病虫害防除所が実施した5月上旬の巡回調査において、モモ新梢葉における発生ほ場割合は、平年に比べ高く、一部のほ場では被害程度も高くなっている(5月21日付け令和7年度病虫害防除情報)。

第2世代成虫の誘殺盛期は、今後の気温が2℃高く推移した場合、6月6半旬頃と予測され、第3世代の防除適期は6月6半旬頃と推定される(表10)。

本種の発生には放任園や無防除のハナモモ園が影響していると考えられるため、こうした発生源が近隣に存在する園地では、今後も発生に注意する。

イ ナシヒメシンクイ

第1世代成虫の誘殺盛期は、今後の気温が2℃高く推移した場合、6月4半旬頃と予測され、第2世代の防除適期は6月5半旬頃と推定される(表10)。

本種の第1世代幼虫は、主にモモ等の核果類の新梢に寄生（芯折れ症状）し、第2世代以降はナシなどの果実に移行する。例年、ナシでの果実被害が多い地域では、近隣のモモ等における防除も徹底する。なお、薬剤による防除を実施する場合には、使用基準を遵守する。

ウ モモノゴマダラノメイガ

被害が発生しているモモ園では、他のシンクイムシ類との同時防除も含め、生育に合わせ6月上旬頃から10日間隔で2～3回防除を行う。被害果実は見つけしだい摘除し、5日間以上水漬けにするか、土中深く埋める。また、前年に被害が多発した園では袋かけを早急を実施する。

エ ナシマルカイガラムシ

果樹研究所内のリンゴでは、6月6日に歩行幼虫の発生を初確認した。ナシマルカイガラムシ第1世代のふ化開始は、6月1半旬頃と予測され、ふ化盛期は6月3半旬頃と推定された（表10）。

カイガラムシ類はふ化期の防除が重要であるため、防除適期を逃さないように防除する。ただし、1回の防除では十分でないため、1週間から10日後にもう1度防除することが望ましい（平成31年3月果樹指導要綱技術編）。

オ ハダニ類

高温期は増殖が速いのでハダニ類の発生状況をよく確認し、要防除水準（1葉当たり雌成虫1頭以上）の密度になったら速やかに防除を行う。

カ カメムシ類

病害虫防除所のフェロモントラップ調査におけるカメムシ類の越冬世代の誘殺数は、8地点中4地点で平年の3～7倍と多い傾向にある（6月13日付け令和7年度病害虫防除情報）。飛び込みをよく観察し、多数の飛来が見られる場合は速やかに防除を行う。

表10 果樹研究所における防除時期の推定（令和7年6月13日現在）

今後の気温予測	モモハモグリガ		ナシヒメシンクイ		ナシマルカイガラムシ	
	第2世代 誘殺盛期	第3世代 防除適期	第1世代 誘殺盛期	第2世代 防除適期	第1世代 ふ化開始	第1世代 ふ化盛期
2℃高い	6月26日	6月30日	6月17日	6月25日	6月2日	6月11日
平年並	6月29日	7月3日	6月19日	6月29日	6月2日	6月11日
2℃低い	6月30日	7月5日	6月19日	7月1日	6月2日	6月11日
起算日：モモハモグリガ第1世代誘殺盛期 6月2日						
ナシヒメシンクイ越冬世代誘殺盛期 4月21日						
ナシマルカイガラムシ 3月1日（演算方法は三角法）						